

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(国語)
／村井 万里子

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ. 学長の定める重点目標

Ⅰ－1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

1. 目標・計画

学校現場の実践に役立つ授業内容を実施するために、以下の目標を掲げる。

1. これまで築いてきた現場との関係をより有効に活用して、教育研究・及び教育実践に取り組む。具体的には県総合教育センター、附属学校の研究への協力、県内教員との研究会活動の活性化等。
2. 大学での学部授業・大学院授業について、これまでの実績を生かし、レベルを維持するとともに、学生・院生の必要に応じてより柔軟に内容を組み立て、実施する。
3. 最終年度となる「先導的大学改革推進受託事業」の担当分の仕事を仕上げるとともに日常及び将来の教育実践研究に生かす。(個人及び集団・具体的には次の「4」につないでいく。)
4. 「教科教育研究会」の活動に参加し、教科間の研究実践交流を図る。

2. 点検・評価

年度目標1: 県総合教育センターの「国語指導力向上講座」講師に昨年につづいて平成23年も招かれ、午前・小学校教員、午後中学高校教員(どちらも特別支援教員を含む)に対してワークショップ形式の演習を行い、好評を得た。附属小・中校とは研究発表会の準備及び助言につとめ、阿波市八幡小学校(6月2日)、吉野川市知恵島小学校(10月6日、11月11日)、小松島西高等学校(11月18日)において、教員研修としての授業研究会や講話、高校生対象に講話等を行って実用性を確認した。／目標2: 学部授業では、教科専門の教員とTTを組む二つの授業(源氏物語、枕草子演習)をさらに充実させることができた。長期履修院生対象の「初等国語」は受講者数が今までと非常に少なかった。／目標3: 「先導的大学改革推進受託事業」は、鳴門国語コースの教科内容担当教員の全面協力により、公開授業の記録を含む報告書をまとめることができた。この報告書は他大学教授から肯定的評価を得た。／目標4: 「教科教育研究会」で「初年次教育の実践報告」を行い、活発な意見交換を行い、環境に恵まれ予想以上の成果を挙げ得た。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

国語コースを中心とする学生を支援するなかで、とくに下記1～4に重点をおく。

1. 学年担任を務める学部2年生の指導助言を以下のことを通じておこなう。
①定期的なHR集合による連絡交流話し合い。②クラス情報交換誌(原則月刊)の作成。
2. ゼミ所属学生(3年生1名、4年生1名)のゼミ研究のサポート及び卒業研究の指導を行う。
3. 大学院修士課程院生(2年生・3名)のゼミ活動を行う。
4. 連合大学院博士課程院生(4年生・1名)の研究をサポートする。

2. 点検・評価

目標1. 努力の結果、おおむね目標を達成した。HRクラスの通信は、学生編集1号を含み17号まで発行した。学生に編集の一部を任せるには至っていない。毎週HRは、全員参加が1回のみ、多くは7～8名参加にとどまる。「学修キャリアノート」の期限通りの提出が13名中6名であったことに課題がある。／目標2. ゼミ学生の卒業研究、ゼミ研究は、毎週おおむね順調であった。／目標3. 大学院生の修士論文研究は、現職3名全員が夏の「鳴門教育大学国語教育学会」で研究発表を行い、充実した内容であった。／目標4. 連合大学院博士課程院生は、博士論文を書き上げ、修士課程2年博士課程4年合計6年間にA論文5編、B論文含めて全12編の論文を仕上げ成績優秀として認められるなど本人の努力が実を結んだ。学位取得後4月1日付けで国立大学准教授に採用され、研究者として順調な滑り出しである。博士課程院生担当が初めてだったので途中の困難は大きかった。教務担当事務官及び副指導教員、審査委員会委員等の大きな助けを受けて、指導教員の責務が全うできたと考えている。

Ⅱ－2. 研究

1. 目標・計画

1. 「先導的学改革推進受託事業」及び「教員養成のための教科内容学研究」プロジェクトのまとめとなる公開授業(3大学合同)を実施し、成果をまとめる原稿を仕上げる。
2. 全国大学国語教育学会『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』のⅢ章の原稿(12月締切)を、綿密な計画を立てて、執筆する。
3. 科学研究費補助金(基盤研究B)「国語科教育改善のための言語コミュニケーション能力の発達に関する連携的・提案的な研究」(植山俊宏教授代表)に院生とともに参加する。
4. 自著「国語科教育基礎論研究」(仮題)の原稿を、2割以上進める。

2. 点検・評価

目標1. 目標を達成し研究上の刺激を得た。／目標2. 『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』Ⅲ章の担当原稿は、予定からかなり遅れ3月16日に提出し、編集者からお叱りとねぎらいの両方を得た。／目標3. 長年継続している科学研究の成果を出版物にする企画が2010年に始まり、最終段階で原稿依頼を受けて「Ⅴ章 コミュニケーション能力評価へ向けて」を執筆。4月23日提出した。編集担当者によって4月30日調整が行われる予定である。現在の科研課題「国語科教育改善のための言語コミュニケーション能力の発達に関する連携的・提案的な研究」は、第2年次(平成23年)から参加したため、班活動の一部に意見のずれが起こっている。11月に徳島市内小学校で実験授業(パイロット調査)を実施できた。最終年度(平成24年)にいかにもとめるかが課題である。／目標4は、ほとんど進展せず。このままでは一向に進まないことを自覚し、平成24年度前期「内地研究員」申請にふみきった。幸い許可を得て現在広島大学教育学研究科において研究中である。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

1. 「先導的学改革推進受託事業」及び「教員養成のための教科内容学研究」プロジェクトの「提案」にもとづき、鳴門教育大学において公開授業(3大学合同)を実施し、成果の総括作業に協力する。

2. 点検・評価

目標1. 東日本大震災(3月11日)のため、東京で予定されていた会合が中止になるなどの事態が起こった。そのなかで、6月11日東京シンポジウムを経て、9月報告書ができあがった。この仕事を通じて「速度感のある作業」を実感した。賛否のある考え方のある「教科内容学」という枠組みについて、その意義と可能性について認識を新たにした。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

1. 「学部附属連絡協議会(国語科)」を開催し、附属校における実習生指導について情報交換を行う。
2. 「第12回徳島国語教育実践研究大会」を開催し、徳島県内外の各校種間の実践交流を行う。
3. 徳島県教育総合センター等で、実践的な研修内容の講義・ワークショップを実施する。(依頼予定)
4. 韓国・京仁教育大学国語教育学科長に近況を知らせる書簡を送る。

2. 点検・評価

目標1. 例年通り、附属学校との交流で教員・生徒・児童の情報交換ができた。／目標2. 「第12回徳島国語教育実践研究大会」を、附属小学校を会場に開催した。同会の創始者世羅博昭前教授(同会顧問に推戴)に講演をお願いした。新しいプログラムによる進行の試みはおおむね好評で迎えられた。／目標3. 徳島県教育総合センターで、国語指導力向上講座の講師を昨年に引き続いて務めた。(平成24年度も講師依頼を受けたが、前期(4月～8月)内地研究員期間であるためお断りし、小～高すべての免許保持者で高校教員経験のある幾田准教授を推薦した。／目標4. この1年間は、連絡のやりとりをしていない。ひとまず、この交流は終了したと見なされる。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)